

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

14. 日露講和会議での大活躍で博士号を授与された安達峰一郎

●ポーツマス講和会議での活躍

明治37(1904)年に日露戦争が起こりました。この戦争は、朝鮮と満州の支配をめぐる日本とロシアが対立し、日本軍の奇襲攻撃によって戦争が始まりました。戦争は日本にとってこれまでにない多数の犠牲者と多額の戦費に苦しみながらも、日本軍が有利に展開。しかし、同38(1905)年になると日本の戦費が底をつき、戦争を継続することが不可能な状況になり、ロシアもまた国内で革命運動が起きて不安定になり、戦争終結を望むようになっていました。

そこで日本はアメリカのルーズベルト大統領に講和の斡旋を依頼し、ロシアもこれに同意したので、アメリカのポーツマスで同年の8月10日から約1カ月間講和会議が開かれました。(ルーズベルト大統領は、日露講和会議を斡旋した功績により、明治39(1906)年にノーベル平和賞を受賞しました。)

ポーツマス講和会議の日本の全権は、小村寿太郎外務大臣と、高平小五郎駐米公使で、その随員として峰一郎ら9名が任命。ロシアの全権はウイッテ元蔵相とローゼン駐米大使でした。写真にあるように、峰一郎は会議に列席し、フランス語の通訳や講和条約の起草委員となり活躍しました。



ポーツマス講和会議時(向かって一番右が峰一郎)

●峰一郎の手紙(※「」は原文、全文は『国際法にもとづく平和と正義をもとめた安達峰一郎』に収録)

峰一郎がポーツマスから父に送った手紙が生家に残されています。“全権団は、会議を決裂させて帰国したほうがよいと東京に何度も打電しました。しかし、その返電はすべて「屈譲セヨ」。最

後には、「露国ノ主張スル総ベテヲ譲歩シテ平和ヲ克復スルニ努メヨ」という勅命(天皇の命令)でした。全権団は「万事休ス」。「強硬ナル小村大使モ拜伏シテ之ニ服シ」、ある者は憤慨し、ある者は泣きました。しかし、「彼等ハ忠良ナル日本臣民也。」勅命に従って「一同切腹の覚悟」で「露国大使ノ前ニ降服ノ恥辱ヲ甘受スベク決意シタリ」と、苦渋の様子を伝えています。

峰一郎のこの便りは、全権団が勅命の訓令を受けたときの模様が赤裸々に綴られたものとして、貴重な資料となっています。

●日比谷焼き打ち事件

日本が戦費不足のため、戦争を継続することができなくなっていることは、作戦上国民に知らされませんでした。そんななか、反政府系政治家や有力新聞の呼びかけもあり、講和条約調印の当日、大勢の人々が東京の日比谷公園に集まり、屈辱的講和反対、戦争継続の国民集会を開きました。そして群衆の一部が暴徒化し、政府高官邸や交番などを焼き打ちにするという大騒動を起こしました。これが全国各地に広がり、山形市でも9月10日に第二公園で県民大会が開かれ、県内から多数の群衆が集まり、市内をデモ行進しました。

ちなみに戦争後、ロシア軍人の捕虜が日本国内に多数送られ、各地に分散して収容されました。山形市にも42名の捕虜が送られてきたので、3つの寺に分散し、収容されましたが、やがてその捕虜たちと市民が親しく交流するようになったといえます。

●功績により博士へ

ポーツマスから帰国した峰一郎は、同39年(1906年)講和会議の功績により、勲三等旭日中綬章と年金260円を賜りました。その翌年には高等官二等に昇進し、博士会から峰一郎の学力が博士に値することが認められ、文部大臣より法学博士の学位が授与されました。さらに、正五位・勲二等旭日重光章も相次いで受章しています。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄

参考文献：児島襄『日露戦争 第五巻』平成2年 文芸春秋社